

研究 2021 年における成果と課題

重点①：学年間でのめざすコミュニケーションの姿の明確化と手だての共有

各々の学年のめざすコミュニケーションの姿にせまるために、研究 2021 年においても図 4 のような手だてをとってきた。成果として、昨年度の研究成果の有用性が改めて確認できる実践が多く見られた。また、新たに有効なものが三つ見られた。一つ目は【モデル提示】、二つ目は【促進する手だて】、三つ目は、【コミュニケーション場面の設定】において見られた。それでは、以下に詳細を述べていく。

重点①-1【モデル提示】

昨年度【モデル提示】では、話合いの型や質問の型、反応の型、話を聞くときのポイント等、全て具体的に提示することが多かった。今年度も、1～3 学年においては、コミュニケーション力の基礎を身に付けるために有効であった。しかし、今年度は、高学年において「出し合う」→「比べる」→「まとめる」等、最適解を導く話合いの進行パターンを三つの手順のみとし、共通実践を行った学年があった。話合いの進行パターンを簡潔にすることで、児童にとってもわかりやすく、どの教科でも活用しやすかったのではないかと推察される。さらに、児童の実態に応じためざす姿に向け、適切な手だてのもと様々なコミュニケーション場面を繰り返し経験してきたことで、話合いの型がある程度身に付き、簡単なパターンさえあれば、自分たちで話合いを進めることができるようになったと考える。

重点①-2【促進する手だて】

個の最適解を導き出す際、予め出てきた考えに各々が順位付けをしてからグループで話合いを始める方が、深まりが見られたという実践があった。最初から考えを一つに絞ってしまうと、自分の考えが固まってしまう、グループで話合いをしても、自分の考えを変えられなくなる場合があるからである。それ故、順位付けをし、自分の考えに幅をもたせると、グループで話合いをした際、柔軟に考えることができ、自分の考えが広がりやすくなるのではないかと推察される。

また、【促進する手だて】の中に、【可視化】がある。今年度は、児童生徒一人一台端末の環境が整備されたこともあり、本校においても児童間のコミュニケーション場面において、タブレット端末を用いた実践が多く見られた。それ故、児童もタブレット端末を使用することに慣れてきた。タブレット端末を使用し、自分の考えやグループでの学びを可視化し共有することで、互いにどのような考えをもっているのかがわかり、考えの違い等、論点を明確にしながらか、その後の話合いを進めることができた。これらのことから、タブレット端末を使用する等、ICT を活用するコミュニケーションは、【可視化】の手だてとして有効であるといえる。

重点①-3【コミュニケーション場面の設定】

話合いの形態には、ペア・グループ・全体のように、人数による違いが挙げられる。ペアの場合は、気軽に意見が言えたり、自分の意見に自信をもてたり、自分と違った考えに気付いたりすることができる。また、グループの場合は、全体では消極的になりがちな児童も発言しやすかったり、自分の考えを広げたり深めたり、児童間で主体的に学習したりすることができる。このように、人数の工夫によるコミュニケーション場面の設定を行った実践は、昨年度から多く見られた。しかし、今年度の研究では、グループの編成の仕方に工夫が見られた。一つは、交流のねらいを児童と共有した上でのグループ編成である。例えば、自分の思考を深めるために、同じ考えをもった者同士で共通点・相違点を聞き合いながら話合いを行うというようなものである。もう一つは、児童の実態を踏まえた教師の意図的な編成である。司会進行が得意な児童やファシリテーションスキルの高い児童を各々のグループに配属し、どのグループでも話合いの質に差が出ないようにするというものである。このように、コミュニケーション場面を有意義なものにするためには、編成の仕方を工夫することも必要であるといえる。

また、出てきた考えを明確に示さないという工夫が見られた実践もあった。児童から出てきた考えを教師が発問しながら明確にしていくのではなく、不明瞭な部分はあえてそのままにして、グループごとに考えるようにするというものである。このように、1 年次の研究成果にもあるような不足感のある状況をつくること、そして、

今年度の実践にある不明瞭な部分を残すこと等、意図的に話合いの余白部分を残しておくことは、児童が話し合う必然性を感じるために有効であるといえる。

また、課題として、二つのことが挙げられた。一つ目は、【モデル提示】における進行・反応・質問等、技能の定着を目的とした型からの脱却である。先述のとおり、型の有用性は確認できたものの、型にしばられるあまり、自然な話合い活動とは異なる不自然な発話が観察されている事例が見られた。それ故、当初は、型を参考にしながら経験を積み、慣れてきたら手順の確認や簡単な掲示物のみとするというように、少しずつ型から脱却できるようにしていきたい。ただし、低学年においては、型を提示することは適切な手段であるため、発達段階のことも考慮していきながら進めていく。

二つ目に、【コミュニケーション場面の設定】において、話合いのスキルを高めていくことと、教科のねらいを達成していくことがうまく関連付かないことが課題として挙げられた。授業の中でコミュニケーション場面を設定し、話合いのスキルを高めていくことは、どの教科においても必要な汎用的能力である。一方で、教科のねらいにせまる場面では、話合いのスキルよりも、話合いの内容が重要になってくる。実践の中には、コミュニケーション力の育成のための場面設定が本時のねらいと関連しなかったために、ねらいを達成することができなかったものがあつた。このことから、教科のねらいを達成し、さらに、コミュニケーション力の育成が図れるような場面をより一層吟味しなくてはならない。これまでも同様な課題が指摘されてきたが、今年度の実践の中で、この【二重構造問題】がより浮き彫りになった。教科のねらいとコミュニケーション力の育成のギャップをどのように埋めていくか、今後の研究課題としたい。

重点②：教育データの活用

教育データの活用については、2021年からの研究で取り上げている。ただ、コミュニケーションに関する評価をデータとして蓄積し、継続的に収集・蓄積・分析することは、エデュグラフィーの開発の関係上、一部の実践のみで扱ったため、今年度は、ルーブリックを用いた評価に関することについて述べていく。

ルーブリックを用いた評価に取り組んだ成果として、二つのことが挙げられる。一つ目は、縦軸の「評価項目（規準）」の反応や表現、話合いの進行に関すること等、全てにおいて児童の意欲の向上が見られたことである。このことは、横軸に「評価の基準」として評価項目の尺度（評価基準）を4段階に分けて記したことにより、児童が自分の課題を意識しやすくなり、改善していこうとする意欲につながったためだと推察される。このように、児童がコミュニケーション力を自己評価し、改善しようとする姿が見られたことから、ルーブリックを用いたことは、有効な手だてであったと考える。

二つ目は、クラスの児童全員が同じ尺度を用いて評価できることから、公正な評価を行うことができるようになったことである。今までは、評価基準が人によって曖昧で、感覚的に評価しがちであった。主観的になりがちだった評価に、ルーブリックを用いたことで客観的な指標が設けられ、それを全員が共有できたことで、児童の自己評価や教師が児童を評価する際にズレが生じにくくなった。このように、公正な評価ができるようになったことから、ルーブリックを用いて評価をすることは有効であったといえる。

一方で課題も見られた。児童がルーブリックを用いて評価したが、そのよさを十分に感じさせることができなかった実践があつた。その実践の中において、一部の児童は横軸の低い評価基準に価値があるとは思えなかったため、自分のコミュニケーション力が身に付いていないにもかかわらず、高い評価基準を選び、自らを過大評価していたのである。このことについて、二つのことが原因として考えられる。一つは、児童に何のためにルーブリックを用いて評価するのか目的を明らかにせず、評価基準の文言について十分な説明を事前に教師が行っていなかったからである。児童に目的と4段階それぞれの尺度におけるコミュニケーションの具体的な姿を説明し共有することで、児童は自分の現状を正しく認識することができると推察する。そうすることで、児童は、低い評

評価基準でも自分の成長のために価値があると考え、自分のコミュニケーション力に応じた評価基準を選び、正しく評価することができる。もう一つは、教師がルーブリックを用いた評価に関するデータを集めたにもかかわらず、児童が評価したことに対して、教師が価値づけを行わなかったからである。コミュニケーション力が身に付いたことを自己評価のみで児童が自覚するより、教師が価値づけすることで、自分のどんな姿がよかったのかを認識することができ、自己の成長をさらに自覚することができる。そうすることが、児童の意欲へとつながり、コミュニケーション力の更なる育成にもつながる。しかし、コミュニケーション力が身に付いているかどうか、教師が児童一人一人を見取り、価値づけしていくことは現実的に難しい。そこで、児童間でルーブリックを用いて、コミュニケーション力の相互評価をすることが望ましいと考える。

さらに、横軸の評価基準についても課題が見られた。評価基準を児童が理解しやすいよう、文言を具体的にする必要があった。理論部が作成したルーブリックをもとに、各学年で発達段階に対応したルーブリックを作成したが、それを提示したところ、児童の反応が薄かったため、理解しやすいように具体的な姿を文言に入れ、改めてルーブリックを提示し直した学年もあった。このように、評価基準には児童が理解しやすいよう、具体的な姿がわかる文言を入れることも必要だといえる。

来年度は、エデュグラフィーを用いた実践が多く見られることとなる。エデュグラフィーを用いることで、教師も児童も、今までより教育データの収集・蓄積・分析がしやすくなるので、今年度課題として挙げられたことの一助となればと考える。